みょうこうケアフォーラム通信

平成３０年度　第１回　みょうこうケアフォーラムを開催しました！

■ 日　時：平成３０年７月２６日（木）１８時３０分から２０時００分
■ 会　場：新井ふれあい会館　ふれあいホール
■ 参加者：１１７名（介護ネットワーク事業所、医療機関、薬局、福祉用具事業所等）
■ 内　容：講演「看取り 人生の最終段階に寄り添う支援」
～かかりつけ医として大切に思うこと～
講師　妙高診療所　院長　松岡　二郎先生
グループワーク

司会は実行委員会の榎本さん

実行委員会の宮下さんから、これまでの取り組みについて紹介していただきました。

平成28年度から「意思決定支援」をテーマに、「～ご本人が望む生活を実現するために～意思決定支援について、私たちができること・するべきこと」について、みんなで話し合い、少しずつ取り組んできました。

今年度は、『看取り～人生の最終段階における意思決定～』をテーマに
引き続き「意思決定を支援すること」について取り組んでいきます

講 演

講師は、妙高診療所の松岡先生。
看取りの現状や支援について、実際の事例を交えてお話しいただきました。

「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」から

【人生の最終段階における医療およびケアについて】
■本人の意思を尊重した上で、進めることが重要。
■治療の内容・中止・変更に関しては、多職種のケアチームで妥当と思われるものを適切に行う。
■ケアチームで可能な限り、疼痛や不安等の軽減を図り、本人・家族の援助を行う。
■時間の経過、病状の変化、患者の意思の変化等に留意し、その都度説明を行い、意思の再確認を行うことが必要。
■本人の意思が確認できない場合は、家族と十分に話し合い、本人にとっての最善の方針をとることを基本とする。

「死亡数の将来推計・看取りに関わる状況」について

■今後20年は、年間の死亡数が増えていく。看取りの場所として、これまで病院で亡くなるかたが増えていたが、約10年前から在宅や施設で亡くなるかたが少しずつ増えてきている。
■最期を迎えたい場所について、約6割のかたは自宅で最期を迎えたいと答えるが、実際には「家族に負担がかかる」「急変時の対応への不安」等から、実現困難と考えている人が多い。

看取りについて思うこと

【施設】

■施設入所時から施設での看取りに同意する人は少ない。
■入退院を繰り返す等の変化を経て、同意に至るケースがある。
■家族と施設の間に認識の差がある場合、入念な説明や意向確認が必要。
■日頃からの十分な病状説明と状況報告が大切。

【在宅】

■終末期が予測された段階で、担当者会議の開催等、サービス担当者との連携を図る。
■精神面・経済面を含めて、家族のサポートが必要。
■緩和ケアのための医療技術の整備も必要。
■元気なうちからの最終段階の意思表示・意向確認が大事。
（アドバンス・ケア・プランニング：ＡＣＰ）

日頃の診察で診ているのは、その人の「人生の最終段階」だが、元気な頃の「ものがたり」を思い浮かべながら、接していくことを大事にしていきたい。

いろいろな所で看取りが行われ始めている。さまざまな思いを抱えながら支援しているのが現状。在宅では、一つひとつの関わりを通して、ケアチームの形を作っていければと思う。

十分な病状説明と状況報告

元気な時からの意思表示・意向確認

～ グループワークから ～

○病状が悪化していく中で、面談の機会があれば、ケアマネも同席することで本人や家族の意向に沿った調整ができるのではないか。
○主治医との連携を密に取り、情報を共有し、対応方法について教えていただくことができたため、家族も病状の変化を受け入れ、良い看取りとなった事例があった。
○在宅での看取りでは、がんの人も多く、急激な病状の変化への対応が難しい。
○終末期の意思確認のタイミングはどうしたらいいか。告知の状況とそれを踏まえ、本人の意思を確認することの難しさを感じている。
○昔は自宅での看取りが当たり前だったが、今は自宅での看取りを経験していない人が多い。そういったことも看取りの場を判断する上で影響してくると思う。
○どの施設でも看取りの対応を行っているが、施設では、本人の意思を確認することが難しい場合が多い。
○特養では重度化が進んでおり、1年で入所者のうち3割以上のかたが亡くなる現実がある。
○看取りについてこれからも学び、本人・家族の意思や意向を尊重できるような関わりをしていきたい。

これまでご本人の望む生活を実現するための意思決定支援について取り組んできた。その中で、今日がある。

関わるみんなで同じ方向を向いていくことが大切であり、そのためには、「ご本人の意思」を確認していくことが必要。

その意思をいつ、だれが確認するのかは、とても難しい問題。すぐに結論が出るものではない。

これからは、もっと自然に、いろいろな場面で「生き方、逝き方」について話せるような地域づくりも行っていかなければと思う。

サービス担当者会議の場など、ちょっとしたきっかけがあったら、「生き方、逝き方」について、本人や家族に話を聞けるようになって欲しいと思う。

まとめは実行委員会の揚石先生

今年度もみょうこうケアフォーラムは、年3回を予定しています。第2回の詳細は、後日改めてご案内します。